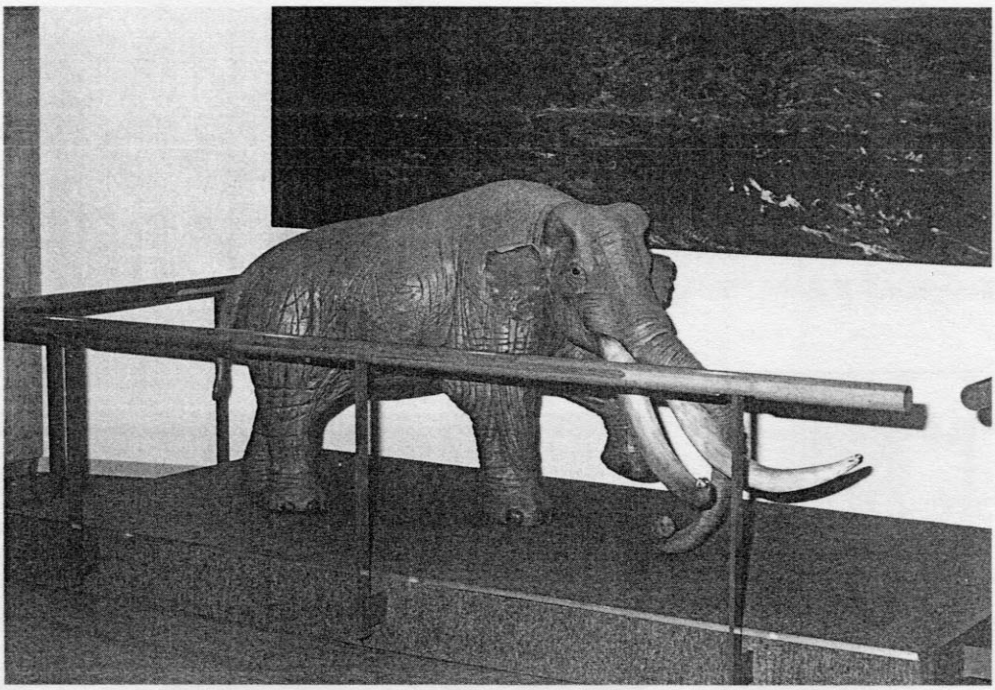
長野市立

博物館だより

第8号



新収蔵の信州象復元模型

昭和62年4月から茶臼山自然史館の展示に仲間入りしました。

この化石象は、裾花川上流で発見され、信州大学の古象団体研究グループの学生達の研究によって、"信州象"（stegodon shinshuensis）と命名されました。

信州象をはじめ、多くのステゴドンの仲間の象たちは、今から300～400万年前（新生代第三紀鮮新世の中頃）に、長野県の地域に棲んでいた象で、まっすぐな長い牙（切歯）を持っていました。

この信州象は、ステゴドンとしては、古いタイプのもので、象の進化をさぐるうえで重要なものです。

この象は実物の3分の1の模型です。

体　重	約5トン
体　長	約3.6メートル
肩の高さ	3メートル

第16回企画展

「稲を伝えた人々―その生活と墓制―」

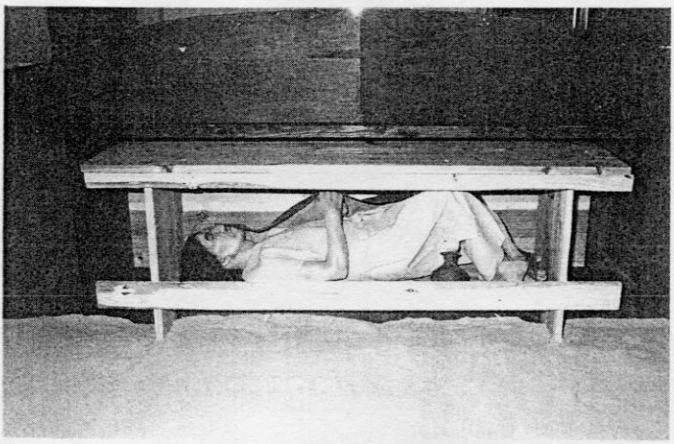
8月30日まで

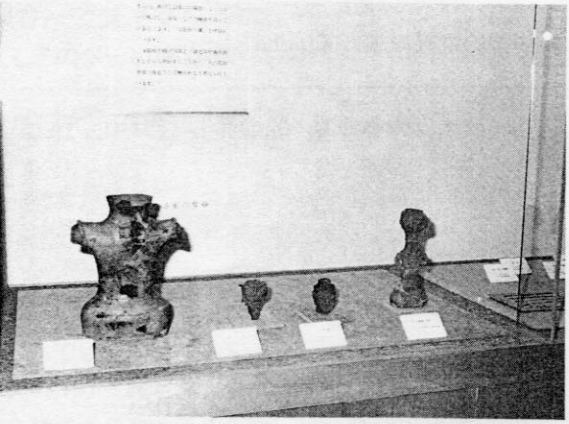
7月19日より、弥生時代初期(約2000年前)の文化にスポットをあてた企画展を開催しています。

2300年前頃北九州に、稲を栽培し、米を食べる新しい文化が定着しました。そしてそれは、次第に海路・陸路を通じて東進し、日本中に広がっていきました。信濃では伊勢湾から伊那谷へと北進し、更に諏訪・松本平を通って、善光寺平に到達しました。その頃の様子は長野市篠ノ井塩崎遺跡群伊勢宮遺跡の発掘調査によって、明らかになりました。伊勢宮では木棺墓という西日本的な墓制が行われ、早い段階から新しい文化が定着し、浸透していたことがわかりました。この展示では伊勢宮の発掘成果をもとに、稲作が伝わった頃の事情を墓制を通じて探ります。

《埋葬の模型》

伊勢宮では30余りのお墓が発見されましたが、実際にどのような木棺に、どのように埋葬されたのか推定してみました。遺体は足を曲げたり、立て膝の状態で幅50cm、長さ150cmの棺に納められ、小形の壺や管玉を副葬しました。遺体の上には赤色のベンガラがかけられ、手厚く葬られたことがわかります。





《母なる形の骨壺》

弥生時代が始まって間もなくの頃、母親の姿をした特殊な土偶が中部高地などにみられます。中空で容器としての機能を持ち、乳幼児骨の骨壺として使われたようです。わが子をいとおしむ母親が自ら作り、母親の胎内にもどし、再生の願いを込めたのかもしれません。展示してあるのは県内のもの3点、県外（新潟県）のもの1点です。新潟県の村尻遺跡の骨壺は高さが45cmもありますが、顔は作られていません。

茶臼山自然史館第１回企画展

「茶臼山の地すべり」

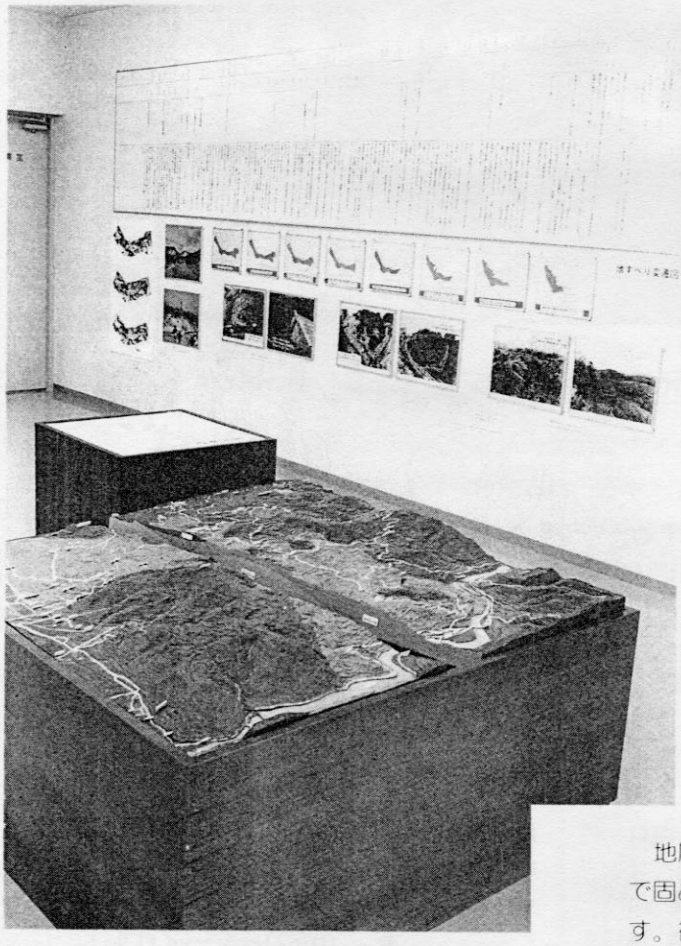
10月25日まで

茶臼山自然史館では、７月26日より、企画展「茶臼山の地すべり」を開催しています。

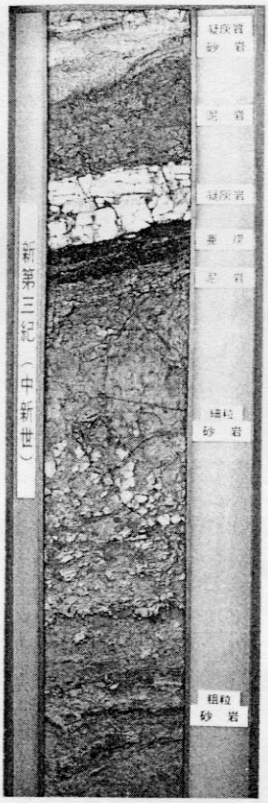
茶臼山の地すべり地は現在、植物園や恐竜公園として多くの人たちに親しまれています。しかしここは10年程前まで大地が動いていた日本でも有名な地すべり地帯でした。しかし、昭和35年に茶臼山の地滑り面が地下40m地点であることが判明してから、それに対応する処置が施工され、昭和50年以降は急速に安定しました。

今回の企画展では、大地が動いていた当時のすさまじい様子を写真、変遷図、年表や当時の住民の関係当局への請願書、嘆願書などの生々しい資料を通じてふりかえります。

また、茶臼山山頂附近の崩落地地層を柱状にはぎとり、展示室に移しました。（右下写真）



茶臼山附近の地形模型



地層の断面にガーゼを貼りつけ、合成樹脂で固めて、ガーゼに地層面を転写したものです。複製ではなくて、本物の地層なので、迫力が感じられます。

川中島合戦話 ― 茶臼山と信玄 ―

川中島の戦で、武田信玄が海津入城前に茶臼山に陣をしたという話があります。海津城以外に兵を留めたという話の真偽のほどは？

急いで出陣した信玄ですから、後続や信州各地から来る兵力を結集する必要がありました。それには各方面に通じる篠ノ井横田城附近が最適です。こゝなら妻女山の補給路をも絶てますし、千曲川を隔てただけですから敵情視察も近くの小丘で充分です。ですから苦労して大部隊を茶臼山に登らせてもこれらの効果はありません。

結局、両雄とも負けず劣らぬ智将であるを強調したいために、後世の人が妻女山の謙信に対抗して信玄を茶臼山に着陣させたのでしょう。

＊資料の収集に御協力を＊

現在、子供にかかわる民俗の調査活動を進めています。子供を育てる時に使った産着やおもちゃなどを集めています。お心当たりの方は当館まで御一報いただければ幸いです。

博物館・あ・ら・か・る・と・

◆プラネタリウムコンサート

10/10(土) 午後6時30分～7時30分

"星空と音楽" と題して、当館プラネタリウム室において、プラネタリウムコンサートを開きます。詳細は長野市広報を御覧下さい。

◆講　座

◦民俗　8/23「山の祭と民俗芸能」

講師・長野県史編さん委員　田口光一氏

◦歴史　9/6「近世の宿場めぐり」

講師・当館副館長　山口純一

◆特別展　10/4～11/23　「森の文化」(仮称)

◆プラネタリウム

(1)夏の番組《天王星探険》8月30日まで

太陽系第7番目の惑星天王星は、1781年ハーシェルによって発見されました。最近までよくわからなかった天王星も、昨年、ボイジャー2号によってそのベールがはがされたのです。

(2)秋の番組《太陽の通り道》9月5日から

太陽はみかけ上、西から東へ少しずつ動き、約1年かかって天を一周します。その太陽の通り道を黄道と呼んでいます。投影では、太陽が次々と宿る黄道12星座を中心に、秋の星空に御招待します。

やぎ座の星座絵（黄道12星座の1つ）

星★空☆散★歩 ― さそり座と土星 ―

夕涼みがてらに夜空を見上げてみると、一面にちりばめられた星たちのささやきが聞こえてきます。さらに南北に流れる天の川や時折現れる流れ星も一緒に参加する時は、にぎやかな大合唱となることでしょう。

天の川が一段と濃い南の空では、Sの字をした大きなさそり座とその心臓に輝く赤いアンタレスが目に飛びこんできます。そして、アンタレスのすぐ隣には土星が並んでいます。今年の土星は輪が大きく開いていて望遠鏡でも見ごたえ十分です。

博物館だより　№8　1987.8.10
編集・発行　長野市立博物館
〒381-22　長野市小島田町八幡原史跡公園内
☎　(0262)84－9011